

## 卒業論文の要旨

論文題目	社会を通してみるアート
氏名	齋藤杏実
メジャー	文化人類学
<p>(要旨)</p> <p>本稿では、現代におけるアートの社会的役割について、政府から民間に至る取り組み、さらには筆者が実際に関わった事例も挙げて記述した。</p> <p>本テーマを選んだきっかけは、現代においてアートが、美術館・展覧会に留まらず、トリエンナーレ・ビエンナーレを代表とする大型芸術祭(地域アート)、さらには舞台芸術やアニメーションを代表とするメディア芸術など、多様化していることに関心を持ったからである。また、アートの社会的貢献度・経済効果は著しく、今や国として文化政策が推進され、民間の企業においても多岐にわたる芸術文化支援の取り組みがなされている。しかし、その一方で、アートへの関心が低く、難しく疎遠なものとして考える人も少なくない。</p> <p>そこで本稿では、アートの多様化について、主に文化政策・地域アート・社会連携の3つの観点から、アートがいかに身近なものであるかを調べ、アートと社会との関係について考察した。例えば、民間の企業等による芸術文化支援の取り組みである企業メセナや、アートNPOの活動は、現代社会とアートがいかに関わっているかを示す好例である。また、筆者が博物館実習を行なった施設(相模原市アートラボはしもと)における、地域交流アートの取り組みも例に挙げ、アートを通じた地域の子どもたちとの交流や、商店街の方たちとの連携で一つのものを作り上げていく地域交流アートについて詳述した。</p> <p>こうしてアートは、年々多様化して進化を遂げ、生活に身近なものとなってきている。とくに実習を通して、文化的なものとしてだけではなく、コミュニケーションのきっかけづくりなど、新しいアートの在り方がたくさん生まれていることがわかった。これから先、アートがどのような変化を遂げていくのかを期待したい。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>美術館は一般的に、古典的絵画や彫刻が展示してある場所というイメージが強いかもしれない。しかし本卒論は、現代における美術と美術館の役割について、現地調査と自身の実習体験に基づき、明らかにしようと試みたものである。本論では、アートという表現を取っているが、高尚なものと思われがちなアートは、実は生活に身近なものになりつつあることを明らかにしようと、かつ現代社会におけるアートの可能性を、博物館学的に検討した力作と言える。</p>	